

第1回 JIA KINKI U-40 設計コンペティション「六甲山上の展望台」

審査講評

第一次審査

全国から集まった100点を超える作品のなかから、第2次審査に進む5作品を選ぶ段階で、すでに審査の困難さは予想できるものであった。次代に求められる、あるいは六甲山の頂に求められる展望台とは何なのか？ 景色を展望するという従来の展望台イメージにとどまらない、あるいはそういったイメージを払拭するような、いくつかの提案が見られた。また、六甲山の頂に何かを建てるという行為そのものに対する解答が、それぞれの提案となってさまざまに作品化されていた。現代社会がおかれている環境や景観の視点の重要性を鑑みたとき、若い建築家諸君が真摯に悩み、これに提案しようとする姿が多く作品から感じとられ、審査委員はそこに未来を感じ取った。あくまでもモダンな建築スタイルのもとで展望台を提案しようとした作品、やや強引に大地を加工する提案には、審査委員は心を動かされることが少なかった。自然を背景に、後世に残る美しい建築を建てたいという意見も、六甲山の頂に建つ美しい建築というイメージが、モダンな具象的作品提案のなかには見受けられなかったのも事実である。そういったなかで、多くの時間を費やし、議論を重ね、最終的に審査委員の合意として5作品を選出した。作品群にみられた解決への手法の、それぞれ代表作品といえるものとなったが、同時に、ぜひプレゼンテーションを聞いてみたいという作品でもあった。

第2次審査

公開プレゼンテーション当日は、驚くほどの好天に恵まれ、会場から見る眼下の眺望は素晴らしいものであった。すでに落選案も含めて審査対象となった全作品が公開展示され、事業主関係者や管轄の環境省の方々もそれぞれの作品を確認することができた。伝わってくる印象像は、落選案の中には何の問題もなく今すぐにも実現できるものが多いが、入選案は説明を聞かねばわからない、あるいは、実現が難しそうというものであった。

入選者のプレゼンテーションは、多方面にわたる検討のもとに良く考えられ、それぞれに説得力のあるものであり、実現能力と人物像に関しては事業主委員も含めて皆、それぞれに対して安心感を持ち得る評価となった。

しかし、最優秀作を選定する審査は、時間を要した。それぞれの作品について、象徴的な場所であること、記念的なコンペティションの実施作品であること、継続的な事業を展開する場所であることなど、多様な視点からさまざまな意見が交わされ、議論された。その議論を踏まえ、最後に審査委員全員による投票がなされ、その集計を確認したうえで、その結果が最終審査結果となることについて、事業主審査委員を含む全員に再度確認を求め、

了承を得て、審査委員会の審査結果として公表した。

最優秀：作品 NO.24 三分一博志氏 Sustainable Rokko Project 六甲枝垂れ

提案の趣旨はよく理解できるものの、その全貌や実現性、事業性に関して、議論を重ねた作品である。従来の展望台イメージからは大きく飛躍し、夜景にとどまらず、寒い時期の冬を含む六甲山の四季の自然、眼下に臨む都市の背景としての自然、を鑑賞するための拠点施設という提案である。事業性の提案もなされてはいるものの、このままで事業主を安心させるものではなかった。葉脈のイメージから導かれた、軽やかそう（重くはなさそう）でおぼろげさを感じさせそう（シャープではなさそう）で、かつ有機的不思議さ、愛着感を予感させる形態は、いや、形態という言葉がふさわしくないような形態像は、六甲山の頂に、カタチあるものとして出現するのはこのようなものかもしれないという感じを抱かせるものであった。実現までにはそう安易ではない過程が必要であろうと予想させる提案ではあったが、最優秀として審査委員が選定したのは、次代に対する環境的視点へのこだわりをその作品の中に、あるいはプレゼンテーションのなかに見て、この場所にふさわしい新しい建築像（オリジナリティ）として、共感を持ったということなのである。良い選択をしたという確信に近いものをわれわれに感じさせる作品提案であった。実現に向けて、実行委員会をはじめとして、審査委員会、J I Aともども協力と支援を惜しまず、歴史に残る展望台の実現と、市民に親しまれ、長く継続運営されるものとなることを期待するものである。

優秀：作品 NO.54 阿曾実氏 絡み合う窓から見えるもの

比較的わかりやすい作品であった。丘の上にふんわりと浮かんだやさしい形と作者がいうその外観よりは、題名にあるように輻輳し絡み合う窓から見える景色に心惹かれるものがあつたが、外周からの景色に関しては、通常の展望台イメージを払拭するものではなく、魅力の継続性に疑問が持たれた。また、壁に囲まれたそれぞれの場所での出来事やイベントのリアリティのイメージがわきにくいという評もあつた。壁に穿たれた矩形の開口部に対する疑問の声もあつた。素材とカタチの関係からは、相当に難しそうなディテールも予想され、白く塗装された仕上げとあいまって、長期的に運営する施設イメージという点で、強く押せない作品となった。審査とは直接の関係がないが、入選案中最年少、かつ地元神戸からの作者の提案で、真摯に六甲山に対して取り組まれた姿勢には、審査委員一同敬服した。

優秀：作品 NO.107 森 清敏氏 一輪の薔薇

こちらもわかりやすい作品であった。冬季の観望のために、有馬の温泉湯を使った足湯のある空中展望台を作ろうという提案である。夏には、冷水を使うという提案もあつた。やわらかくうねったひだ状のすきまがアプローチ空間になり、屋上からのパノラマを対比的

に演出するというのもわかりやすい。ただ、そのひだが六甲産の間伐材を型枠にした凹凸のあるコンクリート打ち放し（特殊塗装）というのには、作者の意図はわかるものの、幼年少の子供から高齢者までが利用する施設として、少し違和感を感じさせた。六甲山頂の展望台というテーマに対し、「神戸には有馬という温泉地が古くから栄えていた」で始まり、風土歴史上の特色として「六甲からの眺望」と「温泉」とした発想には、六甲山自体の場所性を考えてほしかったという審査委員の声があがった。その有馬の足湯と構成のおもしろさを除いて、次代の息吹を感じさせる作品提案であるかが議論となり、残念ながら最優秀には至らなかった。六甲山でなければならぬ形かどうか議論の対象となった。

入選：作品 NO.16 前田茂樹氏 山稜に穿たれる洞窟

一次審査の段階から、評価の分かれた作品である。地中に埋めるかのような提案に対する疑問の声、逆に提案であるススキの山は相当にシンボリックであるだろうという意見、確かに六甲山の頂で感じるからこそその空の気持ちよさ、山腹にうがたれた眺望のための開口からの景色、ロコミで広がるに違いないであろう話題性など、さまざまな意見が出た。次代の展望台とは何ぞやということへのひとつの切り口として、この場所ゆえの答えとして高い評価を与える意見もあったが、逆にそれを評価しない意見もあり、審査委員会全体としての評価はまとまるに至らなかった。地中から天空への開口という形態には、近年、似たような形状の作品もあり、実態の素晴らしさはともかくとしても、今回の実施作品としてはそぐわないのではないかという意見が、審査委員会の結論となった。しかし、六甲山の気分を表現しているとして、この作品を強く押す声があったことも事実である。

入選：作品 NO.57 河原 泰氏 15 分間ひとときの夢～6つのスバコ

これも一次審査の段階から、評価の分かれた作品であった。魅力的と思わせるスバコの提案は、魅力的である一方、エンターテインメント性が強く、広く市民の財産である六甲山の頂にふさわしい作品提案であるかどうか、そこに創出される場所性の質に疑問が持たれた。審査会場に運び込まれた原寸大のモックアップの窓から眺める景色は確かに魅力的で、だが、この山頂以外のどこかで実現されても不思議のない、むしろその方がより魅力的に思えるところが逆に、今回の審査対象として審査委員の心を引きつけなかった。建築と場所が創り出す空間性に関して、疑問の声があがった。しかし、作者のユニークでサービス精神の旺盛な、それでいて、多くの協働者と議論を重ね、多方面からまじめに取り組みされた姿勢には、心を動かされるものが多々あったことも事実である。

以上、講評

2008.12.15

審査委員会を代表して 江川直樹